



有形のレガシーと無形のレガシーの関係性に関する研究

著者	荒牧 亜衣
雑誌名	筑波大学体育系紀要
巻	39
ページ	47-52
発行年	2016-03
その他のタイトル	Relationship between tangible and intangible legacies
URL	http://hdl.handle.net/2241/00143919

有形のレガシーと無形のレガシーの関係性に関する研究

荒牧亜衣*

Relationship between tangible and intangible legacies

ARAMAKI Ai*

1. 問題

1.1 オリンピック・レガシーの多義性

オリンピック・レガシーとは何か。この問いに対して、これまで国際オリンピック委員会(International Olympic Committee、以下 IOC)をはじめ、さまざまな先行研究において、その定義づけが試みられてきた^{注1)}。おそらく、その中心的な意味は、「オリンピック競技大会によってもたらされるもの」という説明に集約されるわけであるが、これまでのレガシーの定義の多くは、佐藤が指摘するところの、個別的で多様性を本質とする「事物・事象」の位相に執着しているものとして指摘せざるをえない¹³⁾。特に、近年では、レガシーということばがオリンピック競技大会の文脈のみならず、国際的なスポーツ・イベントの招致、開催に際して盛んに用いられるようになっており、ポジティブなものから、ネガティブなものまでその対象や範囲は拡大し続けている。

そもそもオリンピック・レガシーという概念が、IOCにおいて強調されるようになった背景には、舛本が指摘するように、否定的あるいは予期しないようなマイナス効果を避けたいというIOCの意図が存在すると推察される¹⁹⁾。オリンピック競技大会の開催候補都市がIOCに提出する開催概要計画書を顕著なものとして、IOCによって、レガシーということばに計画概念としての意味合いが戦略的に付与された訳である。その結果、例えば、日本語のその直接的な翻訳語である「遺産」ということばから類推される「死後に遺した財産」や、「比喩的に前代の人が遺した業績」といった本来の意味内容だけでなく、レガシーはより積極的な含みをもって理解されるようになった。

一方で、海老島も指摘するように、表面的なロンドンオリンピックの成功のキーワードの一つとして捉えられた「レガシー」やIOCが開催都市に実

施計画に求めている条件としての「レガシー」など様々なレガシーに関する言説が入り乱れている中で、東京オリンピック・パラリンピック組織委員会や関連組織がレガシーという言葉にあたかも錦の旗印のごとく利用している現状を決して見過ごすことはできない⁸⁾。レガシーということばが多義的になればなるほど、この概念の本質は曖昧になっていく。その曖昧さが、オリンピックのオリンピックたる所以である理念を置き去りにする事態を引き起こすことすら危惧される。

1.2 有形と無形のオリンピック・レガシー

オリンピック・レガシーについて言及する際に多用される分類として、有形(tangible)と無形(intangible)がある。IOCによれば、有形のレガシーとしては、スポーツ施設や交通インフラの整備、都市の再生、まちの美化、都市の魅力や住民の生活水準の向上につながるものがあり、無形のレガシーとしては、国家威信の高揚感、新しい職業技術の獲得や向上、開催国住民の満足感、自国文化・遺産の再発見、環境意識が向上することが挙げられる³⁾。IOCによる分類は確かに示唆に富むものであるが、研究者によっては、何が有形で何が無形なのかについて見解が分かれる場合もあり、個々の事象をそれぞれ明確に分類することは困難である。

これまで多くの研究者によって指摘されてきたように、無形のレガシーは、有形のレガシーと同様にその重要性が認められているものの、有形のそれに比べ、認識したり、評価したりすることにおいて今なお課題が残っている。しかしながら、IOCもすでに述べているように、無形のレガシーは必要不可欠なものである。場合によっては、無形の要素が、有形のものよりも重要な直接的、間接的影響を有しているとの指摘もある²⁾。IOCはまた、開催都

* 筑波大学体育系
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

市やオリンピック・ムーブメントにもたらされるレガシーの多くが無形のものであることにも触れ、有形のレガシーがより長期的なものとなるためには、その推進力となるような無形のレガシーが必要であることについても言及している¹⁾。2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、2020年東京大会）に向けても、目に見えてわかりやすく、さらには計画的に生み出しやすい有形のものばかりに注力される傾向があるが、無形のレガシーに対する視座が十分に確立されていないことがその理由の一つとして挙げられるだろう。

2. 目的

本研究では、以上のような問題意識から、無形のオリンピック・レガシーに関する分析装置の構築を目指し、有形と無形のレガシーの関係性に着目して検討を行う。無形のレガシーが有形のレガシーよりも有する可能性がある直接的、間接的影響について、より長期的な視点から考察することを試みる。具体的には、事例として1964年に開催された第18回オリンピック競技大会（以下、1964年東京大会）の女子バレーボールで金メダルを獲得し、東洋の魔女として知られている日本代表チームについて論じる。本研究の目的は、無形のオリンピック・レガシーに対する分析装置の構築を念頭に、その基礎研究として、有形と無形のレガシーの関係性を東洋の魔女の事例から明らかにすることにある。

3. 方法

3.1 用語の定義

オリンピック・レガシーという言葉に関して、例えば「1964年東京大会のレガシー」と「2020年東京大会のレガシー」に言及する際には、その内容が異なる。前者は、すでに終了した大会によってのこったもの、後者は、これから開催される大会に関連して計画されるものを示している。本研究では、この二つの意味について区別して論じるために、前者を「1964年東京大会の遺産 (heritage)」²⁾、後者を「2020年東京大会のレガシー (legacy)」と表記する³⁾。遺産の概念については、IOCオリンピック・ミュージアムの定義に基づき、レガシーの一つの形式として捉えることとする²⁰⁾。したがって、本研究では、東洋の魔女の遺産について、有形と無形の関係性を考察することになる。

3.2 有形と無形の遺産

すでに述べた通り、有形と無形の分類に関しては、研究者によって見解がわかれることもある。本

研究では、遺産を対象とするため、IOCオリンピック・ミュージアムによる有形と無形の分類を参照し、研究を進めることとする²¹⁾。

3.3 研究の手順

まず、1964年東京大会で活躍した東洋の魔女について、先行研究を参照しながら整理する。次に、有形と無形の遺産の関係性について明らかにするために、金メダルの舞台となった駒沢オリンピック公園総合運動場屋内球技場、東洋の魔女の象徴的存在であった監督の大松博文、主将を務めた河西昌枝について、1964年から現在に至るまでの長期的な視点から論じる。

4. 結果

4.1 東洋の魔女

東洋の魔女とは、1960年代はじめに活躍した日本代表女子バレーボールチームである。1957年に女子バレーボールが1964年東京大会の正式競技になったことを受けて、アジアから突如出現し、たちまち強豪チームとなった。例えば、夜12時頃まで血みどろの練習を繰り返していたというエピソードがあるように⁶⁾、彼女たちの壮絶な練習風景は、日本人に強く印象づけられた。1964年東京大会決勝戦の様子は、テレビ中継され、66.8%という驚異的な視聴率を記録している。新は、東京オリンピックは、テレビジョンの世帯普及率が90%を超えるなか、NHKと民法が同じ映像を駆使して、全国に向けて中継を行うという、これ以上ない「ナショナル/メディア・イベント」であり、そのフィナーレが東洋の魔女だったと指摘している⁵⁾。1980年代に入ると、日本バレーボール協会とテレビ局の蜜月関係はさらに加速し、テレビコンテンツとしてのバレーボールは一定の地位を獲得した⁹⁾。

1964年東京大会での東洋の魔女の活躍は、バレーボールの普及においても評価できるものであった。特に、彼女たちの壮絶な練習風景とは対照的に、女性が広く一般に楽しめるスポーツとしてバレーボールが広く認知される機会をつくったことは、彼女たちがのこした代表的な無形の遺産といってい

いだろう。現在でも、バレーボールは、中学校、高等学校の課外活動として行われる部活動の加盟校数では女子トップとなっている^{11) 12)}。また、金メダル獲得後、現役選手を引退した彼女たちが積極的に普及活動を展開した家庭婦人バレーボールは、地域に密着した女性のスポーツとして日本全国で定着した。

東洋の魔女を対象とした際に浮かび上がって

るこのような遺産の多くは、非計画的なものであったといって間違いはないだろう。金メダルを強烈に志向し、その結果として生まれたどちらかといえばポジティブな視点に基づく無形の遺産であると考えられる。

4.2 金メダルの舞台

ー駒沢オリンピック公園総合運動場屋内球技場ー

2014年5月25日、金メダルの舞台となった駒沢オリンピック公園総合運動場屋内球技場（以下、屋内球技場）は、老朽化による全面改修のため閉館した。屋内球技場のはじまりは、1964年東京大会の招致を目指して開催された1958年第3回アジア競技大会の際に新設されたバレーボールコートにさかのぼる。その後、1964年東京大会開催決定に伴い、国立霞ヶ丘競技場（以下、国立競技場）を中心として明治神宮外苑に設置された第一会場に対して、第二会場となった駒沢オリンピック公園総合運動場の全面的な改修整備が都市計画事業の一環として実施され、屋内球技場もこの時に完成した。1967年に実施されたユニバーシアード東京大会のバレーボール会場としても利用され、この大会でも日本代表チームは、男女ともに優勝している。

屋内球技場は、1986年から現在の公益財団法人東京都スポーツ文化事業団の前身である（財）東京都教育振興財団に管理運営を委託された。バレーボールだけでなく、バドミントン、ハンドボール、バスケットボール、卓球、フットサル等が行える施設として広く一般市民に開放され、親しまれてきた。近年の施設稼働率も、1999年の62.8%に対し、2009年には93.3%と向上している¹⁶⁾。しかし、竣工後、より長期的な使用を視野にいたった大規模な改修を行っていなかった屋内球技場は、東京都が2009年2月に策定した「主要施設10ヵ年維持更新計画」に基づき、改築の対象施設となった。バリアフリーやユニバーサルデザインといった考え方が普及していなかった時代に建設されたこともあり、建物内におけるさまざまな配慮が欠如していることも改築の大きな要因となった¹⁷⁾。

新設される屋内球技場は、2017年春頃の完成を目指し、工事が進められているが、2020年東京大会の競技会場には、現在のところ含まれていない。駒沢オリンピック公園総合運動場自体が、2020年東京大会の招致段階の計画において重きを置かれていた「競技会場の85%を選手村から半径8キロ圏内に集中」という方針により、会場から外れたことも推察される。

屋内球技場は、東洋の魔女が金メダルを獲得し

た、いわば聖地としての称号を与えられるにふさわしい場所であったはずである。しかしながら、開催後50年を経たその姿は、老朽化や施設規模の問題から、聖地のそれとは掛け離れたものであったことにも言及しなければならない。夏は暑く、冬はとてつもなく寒い室内は、東洋の魔女が優勝をした場所であるという実体としての認識以上のものを、そこでプレーした選手たちにもたらすことは不可能な状況であった。老朽化という問題は、あらゆるスポーツ施設が直面する問題である。国内外を問わず、改修等を経て50年以上存続する施設はもちろん存在する。例えば、国立代々木競技場は、2020年東京大会のメイン会場となる新競技場の建設のために解体された国立競技場とは対照的に、現在のところ、解体される見込みはほぼないといっている。丹下健三による世界的に有名な建築物であるだけでなく、1964年東京大会の象徴としてなんらかの重要な意味合いを保持していることも考えられる。南後は、「メディアにおける建築」という視点から、双方の競技場の違いについて指摘しているが¹⁸⁾、その建築的価値や利用方法に加え、何らかの意味づけがなされているからこそ、より長期的な有形の遺産として存在し続けていることも示唆される。

屋内球技場をはじめ、国立競技場、国立代々木競技場のようなスポーツ施設は、オリンピック競技大会招致の際に強調されるレガシーの一翼を担うものであり、より具体的に実体的な概念として捉えうるものである。しかしながら、これらの有形のレガシーがより恒久的な遺産として継承されるためには、単に実体的な概念としてだけでなく、なんらかの意味づけを伴う機能的な概念として認識される必要があるのではないだろうか。

4.3 鬼と呼ばれた監督 ー大松博文ー

1964年東京大会での女子バレーボールの競技種目追加は、1962年6月にモスクワで開催されたIOC総会で決定した。女子バレーボールの追加は、1964年東京大会組織委員会からの提案であった。

大松は、1962年11月に開催された世界選手権優勝祝賀会の場で一度辞意を表明していたが、田畑政治組織委員会事務総長らの説得を受け、1964年東京大会での金メダルを至上命題として再スタートを切る。オリンピックについて、大松は次のように述べている。

オリンピックにつどう人々は、参加すること自体に榮譽を感じたといわれます。（中略）しかしなが

ら、それは心がまえとしては立派であるけれども、少なくとも現実的ではありません。(中略)あらゆる競技において、いかに小さな試合にせよ、勝つことが第一です。まして、オリンピックや国際選手権大会では、優勝なくしては、いかなる榮譽ありません。¹⁵⁾

1964年東京大会の金メダルによって一躍時代の寵児となった大松は、1965年1月に日紡貝塚を退社した。退社後、まず大松は当時の首相であった周恩来の招きによって、中国でバレーボールの指導を行った。その後、1968年参議院選挙に立候補、政治家へと転身したが、1974年には再選を目指して出馬したものの落選した。大松は再びバレーボールの世界へ戻ってくることになる。

大松は、1978年に創部した実業団チーム「イトーヨーカドー」の発足に大きく貢献した後、同年、心筋梗塞のため57歳の若さで亡くなった。大松が創部に携わった「イトーヨーカドー」は、強豪チームの一角を築いたが、2001年母体となる企業の経営不振を受けて、事実上の廃部となる。幸い、チーム移籍が実現し、「武富士バンブー」と名称を変え、現在のバレーボールのトップリーグであるVリーグに参戦した。しかし、またしても2009年、リーマンショックの煽りを受けた企業の経営難により廃部となる。

大松の強烈なイメージはおそらくその壮絶な練習風景にあるが、これらを遺産として評価しなおすためには別の稿を要する。一方で、これから先さらに50年たった場合に、彼にまつわる有形の遺産はどれほどのこっているのだろうか。ここに無形の遺産に関する分析の必要性が再浮上する。

4.4 魔女と呼ばれたバレーボール選手

ー河西昌枝ー

1962年の世界選手権終了後に辞意を表明した大松同様、選手たちも1964年東京大会を目指すに当たって、大きな葛藤があった。河西は、当時のことを次のように振り返る。

わたしは、いつのまにか二十九歳になっていた。選手としての限界も過ぎている、女として結婚のことも考えずに選手生活を続けることは、人間として、果たして幸福であるかどうか。¹⁰⁾

世界一という大きな目標を達成した直後、オリンピックで金メダルを必ず獲得するための2年間がいかに過酷なものであるかは彼女たち自身が一番理

解していただろう。「オリンピックは(10月)23日だけだ」ということばに象徴されていたように、ソ連との決勝戦だけにすべてが注がれたのである。

1965年1月、大松が日紡貝塚を退社した際、スターティングメンバーであった6名のうち、5名が辞表を提出した。1964年東京大会の前から選手たちの結婚問題は世間の注目の的であった。1964年の日本の女性の平均初婚年齢は、24.4歳だったからである⁴⁾。中でも、31歳になっていた主将の河西昌枝の結婚は、当時首相であった佐藤栄作が仲人をつとめたこともあり注目を集め、披露宴の様子はテレビ中継された。

河西は、1992年に「お母さんの金メダル」という書籍を出版している。女性として、主婦として、母として懸命に生きた自らの半生を「金メダル」というフレーズで表現したのだ⁷⁾。河西は、結婚後も家庭婦人バレーボールの普及に携わり、指導や講演会を積極的に行った。2003年には、日本バレーボール協会女子強化委員長に就任し、2004年アテネ大会では、女子バレーボール日本代表のチームマネージャーを務めた。そして、2013年10月に80歳で亡くなるまで、日本のバレーボール界に影響を与え続けたのである。

2014年5月25日、1964年東京大会決勝戦の舞台となった屋内球技場の閉館に際して、メモリアルイベントに参加した東洋の魔女たちは、代表選手12名中7名であった。77歳になった寺山(旧姓:宮本)恵美子は、次のようなことばを残している。

試合を見ていて、涙が出そうでした。12人そろえばよかったけど、河西さんが亡くなって、入院している人もいて…。ここにきた人は幸せです。¹⁴⁾

魔女たちの数々のエピソードは、現在でも語り継がれていることは事実である。東洋の魔女というフレーズは、1964年東京大会との関連であれば何らかの形で耳にすることも多い。おそらくそこには、東洋の魔女をめぐる数々の言説によって、意味づけられた無形の遺産が存在する。今を生きるわれわれが、「東洋の魔女」を機能的な概念として認識し、意味づける限りこの遺産を継承することが可能となるのではないだろうか。

5. 結論および今後の展望

本研究の目的は、無形のオリンピック・レガシーに対する分析装置の構築を念頭に、その基礎研究として、有形と無形のレガシーの関係性を東洋の魔女の事例から明らかにすることにあった。

本研究において取り上げた屋内球技場、東洋の魔女の象徴的存在であった大松博文、河西昌枝を実体的な概念としてのみ捉えるならば、遺産として現在も存在しているとは断言できない。実体的な概念としての、特に有形の遺産はより長期的な視点で見ると、その姿を失う可能性が高い。一方で、これらの遺産が、機能的な概念として認識されることができたのだろうか。有形、無形の遺産を問わず、それらの対象とわれわれの関係において、何らかの意味づけがなされる場合に、より長期的な遺産として認識されることができるとはならないだろうか。

有形の遺産の多くは、実体的な概念として把握することができる。しかしながら、有形の遺産は機能的な概念として据えられることによって、より長期的な遺産として存在する可能性が高いことも示唆される。さらには、機能的な概念として有形の遺産をより確実に認識させるものこそが無形の遺産の役割であることも指摘できる。この関係において、無形の遺産は、有形の遺産をより長期的なものへと意味づける作用を持っていると考えられる。

本研究では、遺産をレガシーの一形式と捉え、東洋の魔女について検討を行った。特に無形のレガシーは、計画と評価の困難さが指摘されているが、無形の遺産に関する分析を進めていくことは、この解決に向けておそらく有効な方法であろう。無形のオリンピック・レガシーの分析装置の構築に向けては、機能的な概念としての遺産についてさらに検討を進めていきたい。

付 記

本研究は、平成 26 年度体育系研究プロジェクトの助成を受けて実施された。また、本報告は、台湾身体文化学会運動文化研究 25 号 (2014) に掲載された論文に加筆、修正したものである。

注 記

注 1) オリンピック・レガシーについては、特に 2002 年に IOC オリンピック研究センターとバルセロナ自由大学によって開催されたシンポジウム「The Legacy of the Olympic Games: 1984-2000」以降研究が活発化した。現在のところ、2013 年に IOC が発行したハンドブック「Olympic legacy」における記載内容がその定義に関する議論の中心となっている。

注 2) 「遺産」については、IOC を中心に定義されている「レガシー」の肯定的なイメージを極力排除し、批判的に捉え返すために枠組みを設定した石坂らの概念図を参照した。石坂

友司、松林秀樹 (2013) : <オリンピックの遺産> の社会学 - 長野オリンピックとその後の 10 年 - . 青弓社, 東京, 20-23.

注 3) 有形の遺産については、建築物やモニュメント、歴史的な場所、芸術作品、本や新聞が挙げられている。無形の遺産については、ことば、展覧会、映像、音楽、科学的知識、習慣、技術などに加え、スポーツに関連する儀式、特定の動き、技術的なノウハウについても考慮しなければならないと指摘されている。

文 献

- 1) IOC (2003) : The legacy of the Olympic Games 1984-2000, IOC, Lausanne, 2.
- 2) IOC (2010) : Guide on Olympic Legacy 5th update cycle - post Vancouver Winter Games. IOC, Lausanne, 30.
- 3) IOC (2013) : Olympic legacy. IOC, Lausanne, 9.
- 4) 新雅史 (2013) : 「東洋の魔女」論. イーストプレス, 東京, 138.
- 5) 同上書, 167.
- 6) 同上書, 172.
- 7) 同上書, 204.
- 8) 海老島均 (2015) : 特集オリンピック・レガシーを巡る言説・実像 - 特集のねらい. スポーツ社会学研究 23(2) : 23.
- 9) 大野晃 (1996) : 現代スポーツ批判 - スポーツ報道最前線からのレポート -. 大修館書店, 東京, 39-40.
- 10) 河西昌枝 (1965) : バレーにかけた青春 - キャプテン生活八カ年 -. 講談社, 東京, 30.
- 11) 公益財団法人日本中学校体育連盟 (2015) : 学校数・加盟校数調査 (女子). http://njpa.sakura.ne.jp/pdf/kamei/h26kameiseito_f.pdf, 2015 年 11 月 2 日.
- 12) 公益財団法人全国高等学校体育連盟 (2015) : 加盟登録状況. <http://www.zen-koutairen.com/pdf/reg-26nen.pdf>, 2015 年 11 月 2 日.
- 13) 佐藤臣彦 (1993/2001) : 身体教育を哲学する - 体育哲学叙説 -. 北樹出版, 東京, 18.
- 14) スポーツ報知 (2014) 駒沢屋内場の閉館イベントに東洋の魔女集結, <http://www.hochi.co.jp/sports/ballsports/20140525-OHT1T50341.html>, 2014 年 6 月 18 日.
- 15) 大松博文 (1963) : おれについてこい! - わたしの勝負根性 -. 講談社, 東京, 21.
- 16) 東京都 (2010) : 駒沢オリンピック公園総合運動場改修・改築基本計画, 東京都, 5.

- 17) 同上書, 8.
- 18) 南後由和 (2014): 東京オリンピックに向けた
スケッチー都市とスポーツー, 現代スポーツ
評論 30: 105.
- 19) 舩本直文 (2014): 無形のオリンピック・レガ
シーとしてのオリンピックの精神文化. 体育・
スポーツ哲学研究 36 (2): 97-107.
- 20) Myrlam Bouverat, Anne Chevalley (2005):
Finding the Root of Sport. IOC, Olympic Museum,
Lausanne, 5.